

## イタリア南部経済発展に関して1950年代に書かれた 時局論の詳説と検討 (5)

後藤修三

Some Expatiations and Examinations of the Articles on the  
Economic Development of Mezzogiorno Written in the 1950s (5)

Shuzo GOTO

### ABSTRACT

The 1950s were the crucial period for the economic development of Mezzogiorno. In 1950 three laws of the land reform were promulgated and the agrarian reform and modernization began to be implemented. In the same year the *Cassa per il Mezzogiorno* (the state fund for the South) was set up. A great number of scholars, journalists, essayists and politicians participated in the discussions of the *questioni meridionali* (the southern questions) and made public their opinions in magazines and newspapers. This paper aims to expatiate and examine the then current articles. They are different from the statistics or the academic researches. They convey us the enthusiasm or the desperation of the discussants who witnessed the southern situation. These articles were collected meticulously in *Informazioni SVIMEZ* which *Associazione per lo sviluppo dell'industria del Mezzogiorno* continues to publish until today since its foundation in December 1946. This paper picks up a newspaper article *I problemi della Calabria* (the problems of Calabria) collected in *Informazioni SVIMEZ*, Anno VIII-n.I, January 5, 1955, in order to expatiate and discuss the witness' opinion on the economic development in one region of Mezzogiorno.

KEYWORDS : regional development, southern questions, Calabria, sfasciume geologico, bacini montani, prevenzioni provinciali

### 1. はじめに

1950年代はイタリア南部経済発展にとっては決定的に重大な時期であった<sup>1)</sup>。すなわち、1950年に農業改革に関する3つの法案が公布され、農地改革と農業近代化が着手された。また、同年、南部開発政策を専業とする強力な国家機関、南部開発公庫 (*Cassa per il Mezzogiorno*) が設立された。農地改革、農業近代化政策、南部への公的資本投下をめぐって膨大な数の論文や記事が書かれた。

本稿は、1950年代にイタリア南部経済発展に関

して書かれた雑誌記事、新聞記事の詳説と検討である。統計資料や研究論文とは違って、当時実際に現場を目撃した論客たちの熱い息吹あるいは絶望的な溜め息が伝わってくる。

出典は、*Informazioni SVIMEZ* からである。この雑誌は南部工業化促進協会 (*Associazione per lo sviluppo dell'industria del Mezzogiorno*) がその創設 (1946年12月) につづいて発刊開始し、現在に至るまで発行しているものである。イタリア南部政策に関する立法の情報、イタリア南部のみならず他の停滞地域に関する文献、雑誌記事、新聞記事を掲載している。

受理日：平成17年10月11日

本稿では、以下の記事を詳説・検討する<sup>2)</sup>。

## 2. カラーブリアの諸問題

### (*I problemi della Calabria*)

この記事は *Informazioni SVIMEZ*, 1955年1月5日号に掲載されたもので、出典は次のとおりである。

ジョヴァンニ・アンサルド「カラーブリアを救うために」、*イル・マッティーノ*, ナーポリ, 1955年1月2日 (Giovanni Ansaldo: *Per salvare la Calabria, Il mattino*, Napoli, 2 gennaio 1955)

カラーブリアは、その沿岸地方を旅行する人にとっては、すばらしい風光明媚の地として出現する。また、内陸部においては、アルプスの盆地の美しさで輝く希有な地域を領有している。しかし、全体としては、カラーブリアは地理的には最もみじめな地域である。カラーブリアは、フォルトゥナート紙が恐ろしいほど明確に定義づけているように、「地理的崩壊地、二つの海の間の振り子 (uno sfasciame geologico, pendulo tra i due mari) である。アペニン山脈が、イタリア半島のつけ根まで貫いていることが、カラーブリアの構成的有機的不幸を完璧に明示している。他の地域、たとえばエミーリアでは、アペニン山脈はそれほど大きな障害を構成していない。カラーブリアの土地は、地質学者が雲母質と呼ぶ、崩壊しやすい地質である。そのうえ、激しい風化過程にある花崗岩で構成されている。たびたび豪雨となる降水の作用によって、潜在的には、全カラーブリアは山崩れ地帯である。すなわち、全カラーブリアは、長期的に見れば、腐植土の薄い表皮を剥ぎとられ、石灰石の巨大な骸骨となる危険の中にある。カラーブリアは、何世紀にもわたって、何千年にもわたって、なすがままに放置され、いやもっと悪いことには、略奪農業に苛まれてきている。そこでの農業の全知識は、ただ単に、木を切り倒してその場所に小麦の種を蒔くみじめな試みに集約される。その結果、山々の傾斜地では、雨が降

ると、小麦生産に必要なその小地面は洗い流される。そして、山羊たちだけの気にいる岩々が露出し、元の木阿弥になってしまう。かくして、カラーブリアは、毎年毎年、毎世紀毎世紀、その生産のための表土の利用面積を喪失するように運命づけられているのは疑いない。

それゆえ、カラーブリアは、他のすべてのイタリアの地域以上に、現状のまま保存されるのではなくて再構成されるために、有機的・総合的・国家的努力をより多く必要とする地域である。そして、その努力は、最も高く最も近寄り難い山岳盆地で、すなわち住民のほとんど住んでいない地域、都市や沿岸地方の人々の知らない地域で、開始されるべきである。そして、その努力は、遠くを見透した展望に基づくものでなければならない。換言すれば、それは、いまだ生まれてきていない世代のために向けられねばならない。より拡大しより充実しようという野心を抱く都市・道路建設や土地改良を望む沿岸地方・最後により多くの人口をもつより進歩した地帯の直接的利益は、たとえそれが正当なものであっても、他の利益、すなわち地理的に最も重要な地帯の利益、全カラーブリアの、全カラーブリア人の利益に歩を譲るべきである。

いま、次の事態はここでは我々はあえて言わないが、社会科学の分野や文学の分野で卓越したカラーブリア人によって言われ、証明されたことである。この利益は最も崇高なものであり、個人や家族や村落を超越し、すべてを包含するものである。ところが、運の悪いことには、もしこのような利益の理解を頑強に拒む個人——もちろん一般的な意味で言っているのであるが——が存在する地域があるとすれば、それはまさしくこのカラーブリアである。カラーブリア人は最も誇り高く、最も屈強で、自己の力を最高に発揮できるイタリア人である。しかし、どのような問題についても、その全体像、とくにカラーブリア人にとって根本的な問題の全体像を直視することを頑なに拒むイタリア人でもある。その根本的な問題とは、いままことに取り組まなければならない、恐るべき自然的

地理的崩壊にみまわれている土地保全の問題である。カラブリア人のもつ頑固さのために、すべての試みは、非常に度々無に帰してしまった。不十分ではあるにせよ、カラブリアにたいするその義務を果たすために残りのイタリアによって試みられた施策、遅ればせではあるが、歴代の政府によって採択された緊急措置、カラブリアの全般的支配的問題——山岳盆地のそれ——を解決するために多少とも継続的になされた総合的努力は、地方的、家族的、厚かましい攻撃的な諸利害の噴出によって、いわば、打ち負かされてしまった。1953年の大洪水以後カラブリアに住んだ人々は、その洪水の原因を研究した。多くの討論がなされ、多くの研究が行われ、多額の出費が投じられた。それにもかかわらず、レッジーノの河川は破壊と死をもたらし続けている。それらの河川はカラブリアに対して潰滅的活動をし続けてきた。その理由は、カラブリアの頑固者たちが僅かばかりの私有地を自分勝手に死守しようとして、全体的保全の努力を歪めてしまったからである。その結果は、全般的破壊であった。このことを、カラブリアの人々は認知し、理解すべきである。

最近の内閣評議会で提出された諸課題は、絶対的意味において全カラブリアの利益を最優先するために、カラブリアの雑多な小利益の運命的硬皮を打ち砕くべき第一歩を構成している。周知のごとく、それらの課題においては、当然のこととして山岳盆地の整備、住民の部分的全体的移動をとともう山地経済の活性化のための特別事業を実施する目的で、12年間で2,400億リラが計上されている。しかし、さらに、行政の旧制度を支配する権限を有する推進機能と調整機能をそなえた民間委員会の設立が前提されている。すなわち、より明確に言うならば、これらの何千億リラが何に出費されたか、全カラブリアの利益になるよう使われたかどうか、その委員会は監視すべきである。

このような決意に到達することが必要であった。すべての凝り固まった地方的思想や偏見から最も解放されたカラブリア人たちが、そのような決

意の必要を認識し、委員会がその活動にとって適切と判断する事業を実施するであろうことを、我々は祝福する。というのは、カラブリアを救済するためには、最も直接的に利害関係を有する人々、すなわち全カラブリアの活動を救援しないならば、国家から支給される何十億リラという割当金も決して十分ではありえないであろう。

## 注

- 1) この時期の重要性については、多くの識者の指摘するところである。たとえば、エミリオ・セレーニは次のように言っている。「またここ一年あまり〔1956年を指している——引用者〕、わが国の進歩的民主陣営のなかで、農村情勢と農業政策の諸課題をめぐる広範な論争が、この「古いものと新しいもの」とのたたかひのかたちをとって展開されてきたのは、けっして偶然のことではない。……じっさい「解放」後の十年間に、農村でも、また農村でこそ、「古いものと新しいもの」との間の対立は、客観的に、とくにめだっている。農民大衆がその行動によってかちとった成果は、疑いもなく、かれらの闘争の新しい条件をつくりだすのをたすけた。この状況のもとでは、どんな命題、どんな公式も、それがイタリア農業の現実を説明し、変革するうえで決定的な役割をはたしてきたものであったとしても、現状でのその妥当性を吟味しないまま、機械的にそれをくりかえすだけに終わるとすれば、これ以上の危険はないであろう」(エミリオ・セレーニ著中村丈夫・植原義信訳『イタリア農業の構造的改革——イタリア農村の古いものと新しいもの——』、三一書房、1959年、p. 5.)

- 2) この論考に直接関連する文献として次のものを掲げておく。

拙稿「南伊工業化政策に関する実証的考察——一つの事例研究」, 鳴門教育大学研究紀要第13巻 (1998), pp. 89-96.

拙稿「地域格差解消への試み——イタリア南部の場合——」, 松坂大学現代史研究会編『現代史の世界へ』, 1998年3月, pp. 120-133.

拙稿「ラッセル・キングのMezzogiorno論の詳説と検討(1)」, 鳴門教育大学研究紀要第15巻 (2000), pp. 27-35.

拙稿「イタリア地域経済のmolteplici sfaccettature と la riforma agraria」, 四国大学情報研究所年報8号, 2002年12月, pp. 105-111.

拙稿「イタリア南部経済発展に関して1950年代に書か

後藤修三

れた時局論の詳説と検討(1)], 四国大学情報研究所年報 9 号, 2003年12月, pp. 121-124.

拙稿「イタリア南部経済発展に関して1950年代に書かれた時局論の詳説と検討(2)], 四国大学紀要人文・社会科学編 第21号, 2004年 3 月, pp. 123-128.

拙稿「イタリア南部経済発展に関して1950年代に書かれた時局論の詳説と検討(3)], 四国大学情報研究所年報 9 号, 2004年12月, pp. 277-281.

(後藤 修三: 四国大学 経済学研究室)